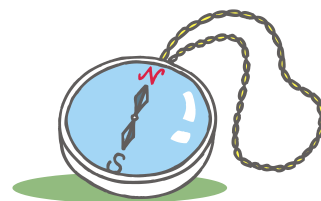


# 羅 針 盤

第 11 号

令和5年7月10日（月）



## ◆ 6月23日「沖縄全戦没者追悼式」より

沖縄戦から78年もの月日が経過し、最後の激戦地となった沖縄県糸満市にある摩文仁（まぶに）にある平和記念公園では、太平洋戦争末期の沖縄戦での犠牲者を悼（いた）む「慰霊の日」（6月23日）に「沖縄全戦没者追悼式」が営まれました。住民を巻き込んだ激しい地上戦の末、20万人以上もの人たちが亡くなり県民の4人に1人が命を落とした昭和20年の沖縄戦。今年の追悼式は、4年ぶりに一般の方も参列することができたそうです。式典では、児童生徒を代表して、私立つくば開成国際高校3年生の平安名秋（へいあんなあき）さんによる平和の詩「今、平和は問いかける」が朗読されました。（全文を掲載します。）平安名さんが中学生の頃に糸満市の摩文仁にある「平和の礎（いしじ）」を訪れた際のことですが、祖母が戦争で亡くなった兄の名前に触れて、そして、涙する姿が今もしっかりと目に焼きついているそうです。朗読するときには、詩の原稿とともに、祖母が大切に保管してきた海軍で亡くなった祖母の兄の写真を持ってあがりました。参列者に問いかけるように「私は過去から学び、そして未来へと語り継いでいきたい」と、静かな会場に力強く響いた彼の声は、平和を紡ぐ決意を示したものでした。参列者の中には目を閉じて聞き入り、涙を流す人がたくさんいました。78年前の沖縄戦と現在の国際状況を重ね合わせて、沖縄のチムグクル（肝心）という言葉を通して、彼の思いは「沖縄戦を経験したからこそ、平和への思いを伝えていける」という言葉で締め括られています。



## 「今、平和は問いかける」 私立つくば開成国際高校3年 平安名 秋（へいあんな あき）

夏六月  
溶けかけたアイスを手走り出す  
緑萌ゆるこの島の屋下がり  
礎に刻まれた「兄」に  
まるであの日のように  
そっと触れるおばあさんの涙は  
陽炎が登る摩文仁の丘に  
ただ果てしなく広がっていく  
その涙は体を包み込み  
私を「あの日」へといざなう  
限りないこの空は  
何を覚えているのだろう  
涙に満ちたおばあさんの瞳は  
何を語りかけているのだろう  
七十八年前の  
あの日  
あの時  
かけがえのない  
たったひとつの命が  
憎しみと悲しみの中で  
散っていった  
名も無き赤子の

微かな  
微かな泣き声は  
震える母の手によって  
冷たく光の無いガマの中で  
儚く消えていった  
幾多もの砲弾が  
紺碧の海を黒く染める鉄の嵐となって  
この島に降り注いだ  
戦争が起きる前  
そこには日常があった  
私達と同じように  
原っぱを駆け回り  
友達とおしゃべりをする  
みんなで暖かいご飯を食べ  
時には泣き  
時には笑い  
時には「ありがとう」を伝える  
そんな今と変わらない日常が  
平和が  
そこにはあった  
平和は不確かで  
脆く崩れやすい

いつもすぐそばにあるのに  
いつのまにか消えていく  
おばあさんの涙は  
摩文仁の丘に  
永遠（とわ）に灯る平和の火は  
今、私達に問いかける  
平和とは何かを  
私達に出来ることは何かを  
私は過去から学び  
そして未来へと語り継いでいきたい  
おばあさんの涙を  
沖縄の想いを  
かけがえのない人達を  
決して失いたくはないから  
今日も時は過ぎていく  
いつもと変わらずに  
先人達が紡いできた平和を  
次は私達が紡いでいこう  
そして世界に届けていきたい  
平和を創り  
守っていく  
この沖縄の「チムグクル」を